

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

“「JR総連・東労組」崩壊の兆し!?”

「国鉄改革の裏側」ダイジェスト版 第7回

あの元国鉄労働課長が明かす「国鉄改革の裏側第5弾」が【「JR総連・東労組」崩壊の兆し!?”】という本になった。本紙は筆者（宗形明氏）の了解を得て、『JR東日本革マル問題の現状』をダイジェスト版として紹介することとした。

谷川忍『小説労働組合』と福原福太郎『発刊以後』

同書で私が最も注目したのは、「小説」の体裁をとりながら、福原氏が、今も続く党革マル派と松崎氏の濃密な関係を、読者がはっきり認識できるよう、意図的に暴露した点だ。

「俺< 福原>は労働研究所< 自然と人間>社を会社組織に転換するのはいい。しかし、そこに鉄道連合< JR総連>を攻撃している労働者党< 革マル派>のメンバーを入れることには反対だ。皆が言う良いメンバーかどうかの問題ではない。彼らを入れる事自体を認められない。そうしたいというのなら、最低限、組織の中で議論し意思統一をはかるのが当然ではないか。」2002年が明けた。労働研究所の会議には、常連メンバーのほかに、鉄道連合の軽部委員長< JR総連小田裕司委員長>と川下書記長< 同山下信二書記長>が参加するようになっていた。軽部が口を開いた。「暮れから、良心的な労働者党メンバーと交流してきた。彼らの中に、雑誌編集に詳しい者がいて『労研』について意見交換をした。いくつかのアドバイスがあった。先ず、今のような内容では面白くないということだった。執筆者についても鉄道連合のOBではなくプロに依頼した方がいい。経営については労働組合との関係は切断して民間会社にしたらどうか。場所も鉄道連合と同じ住所ではないほうがいいとの意見だ。彼らは人も出すし出資も考えていいと言っていた。検討するのは当然だが、結論はできる限り早い方がいい。鉄道連合は前向きに考えている。」大元< 松崎明>の朝令暮改は日常茶飯事だ。そのことはリーダーとして必要なことである。鈴木< 福原>がとやかかいうことではない。問題は、敵対関係にある労働者党のメンバーと共同の編集、経営をするなどという点だ。いくら大元の指示であっても鈴木は納得できなかった。「暮れの合意はどうしたのか。良い労働者党員というが、鉄道連合に攻撃をかけてきている組織のメンバーに連いはない。それと共同経営をするなど組織として議論も意思統一したこともない。現在でも鉄道連合は労働者党に組織攻撃をされているのではないか。彼らの言っている内容についての提言は納得できる点もある。それは具体的に判断していけばいい。くり返すが、彼らと共同経営するのは反対だ。どうしてもというのなら、組織の意思統一をはかるのが前提だ」鈴木が発言が終わらないうちに軽部委員長が口をはさんだ。「鈴木さん。言っておきますが、これは組織で決めたのですよ。組織が...意味は分かるでしょう」出席者は顔を見合わせて沈黙した。敵対している労働者党のメンバーと共同経営するなどという重大な方針を、決められるのは大元以外にはない。まして、暮れに大元がまとめた内容と異なる案を出せるのは、大元本人以外の誰もできないと知っていたからである。労働研究所の今後の方針をめぐる会議は、その後何回か開かれた。「労働者党メンバーと共同経営のあとは共同戦線か。俺は絶対に認められない」鈴木がそう主張すればするほど場はしらけた。すでに代表とは名ばかりになっていた。「いつまでそんなことを言っているのか。代表だけの足を引っ張っている。これでは少しも前にすすまないではないか」川下書記長の意見に出席者全員が深くうなずいた。鈴木は意見は無視され、大元の指示のもとに、労働研究所の新たな構想はどしどし進められていった。軽部委員長が大元に鈴木の処遇について報告した。(軽部が)鈴木と顧問の留任を確認した次の日である。報告が終わらないうちに大元は軽部を怒鳴りつけた。「なにを寝ぼけているんだ。鈴木を誰が保障するというのか。鈴木がケジメをつけるために辞任するなどといっているのは本音じゃあない。オレからの逃亡だよ。すぐに鈴木を顧問留任を撤回しろ」大元は2月の始めに受けとった鈴木の手紙を思い出した。 - 中略 -

大元は面白くなかった。近くにいた鉄道協会理事長の武藤< 佐藤政雄>に手紙を投げて言った。「鈴木野郎、65歳でケジメなどと格好つけるなっていうんだ。オレや武藤に対する面当てだよ。何歳になろうとも、この組織に君臨していくんだ」大元に宛てた鈴木の手紙は、鉄道連合の役員達に回し読みされた。何日かたって鈴木が挨拶に来た。大元は渋面をつくって横を向いたまま一言も口をきかなかった。

大元は辞任のこともさることながら、自分が鉄道連合の役員に指示した労働研究所の新しい構想に、鈴木が反対しているのも癪にさわっていた。(p. 16~17)

- 中略 -

やがて、「大元が鈴木を顧問留任を要請したにもかかわらず、鈴木が拒否した」との話が組織内に拡げられていった。(p. 18)

- 中略 -

後に会議の報告を受けた大元が軽部達を怒鳴りつけた。「鈴木をなぜ辞任ではなく解任にしなかったのか。なぜ有志会議< 「JR労研」幹部会議>から除名しなかったのか。ボケもいいとこだな。鈴木は解任で除名だ。いいな」(p. 19)

私がビックリ仰天したのは、福原社長の『自然と人間』社の経営や、月刊誌『自然と人間』の編集を巡って、松崎氏の意向を受けて党革マル派とJR革マル派が幾度も会議を開き、共同経営に向けて動き出していたことだ。しかも奇怪なことにこの時期は、例の革マル派による「JR東労組OB「南雲巴」こと坂入充氏拉致監禁事件」をめぐる、表向きには革マル派對「JR総連・東労組」との対立構図が華々しく演出されていたのである。

そして私が得た情報では、事実、坂入充氏の帰宅と前後して複数名の革マル派活動家が『自然と人間』社に入社している。不審きわまりない「坂入事件」の謎も何一つとして解明されていない。「JR東日本革マル問題」の闇は限りなく深く、かつ濃い。

さて、谷川忍の筆名で『小説労働組合』を刊行した福原福太郎氏は、06年9月、今度は実名で『小説労働組合』発刊以後』を世に出した。ここでも反本部派と「東労組を良くする会」を「組織再生グループ」と呼んでその活動を評価する一方、松崎・本部派を痛烈に批判している。

最後に、私は党革マル派と福原福太郎氏との関係にある疑念を抱いているのだが、この点についてはいずれかの時機に、稿を改めて論述したいと思う。

【「JR総連・東労組」崩壊の兆し!?(高木書房)P.90~P.96】